意見文を書くための指導方法の工夫
－「読む」と「書く」を関連させた説明的な文章の学習指導過程－

紀の川市立粉河小学校
教諭　平　井　千　恵

【要旨】
本研究では，意見文を書くための指導方法の工夫として，説明的な文章を用いて「読む」と「書く」を関連させた学習指導過程を提案した。具体的な指導方法は，まず，文章の構造と機能を分析的に読み取るために，５つの観点を設定し説明的な文章を分析的に読ませる。そして，「読むこと」で理解した文章の構造と機能を生かして意見文を書かせることで，文章の構造と機能の理解を図る。この指導方法で授業を行った結果，児童は，教材の内容を理解するだけではなく，相手に分かりやすく伝えるための効果的な文章の書き方や接続語の使い方があることを理解した。

【キーワード】
小学校国語　説明的な文章　意見文　「読むこと」と「書くこと」の関連

１　研究の目的

本研究は，児童が目的に合わせて文章の構成を考え，自分の考えを論理的に説明，表現する力を育成するための指導方法について探るものである。

平成24年度の全国学力・学習状況調査の小・中学校の質問紙調査において，本県では６割以上の児童生徒が，「文章で自分の意見を表すこと」に難しさを感じている。さらに，各教科において「自分の考えを書く」,「簡潔に書く」,「資料を用いて説明する」の問題正答率が５割を下回ることから，「書くこと」に課題があるといえる。

その要因は，児童生徒が文章の構成についての理解が不十分なので，問題に対する解答を適切に記述することができなかったためだと考える。筆者のこれまでの実践においても，接続語や文末表現などの文章の構成を筆者があらかじめ示し，示した構成に従わせて児童に内容を書かせるという指導が多かった。そのため，文章の構成を児童が自分で考えて書くといった活動が不十分になり，児童は文章の構成についてあまり理解できていなかった。筆者は，文章の構成を考えさせて書かせる指導を十分意識できていなかったのである。これらのことから，児童に文章の構成を意識させて書かせる指導が必要だと考える。

文部科学省言語力育成協力者会議は,「従来の教育においては，感性・情緒の面に重点が置かれ，論理や表現法に関する配慮が不足していたので，義務教育の段階で，言語運用法の指導を体系的に行うことが求められる（※１）。」と，論理や表現法の指導の重要性について指摘している。

そこで本研究では，従来不十分であった論理や表現法の指導を重要視する。そして，児童が文章の構成を意識して自分の考えを明確に伝えるという視点から，意見文を書くという活動に着目し研究を進める。

また，教科書教材を読むことで，論理的な表現法を身に付け書くことができるような学習指導過程について工夫することとする。

２　文章の構成への注目

（１）説明的な文章の指導の視点

『小学校学習指導要領解説国語編』（2008）に，各学年の「Ｂ書くこと」の「構成」，

「記述」に関する指導事項と，「Ｃ読むこと」の「説明的な文章の解釈」に関する指導事項を関連させて指導することが効果的であると指摘されている。本研究では,「Ｃ読むこと」の「説明的な文章の解釈」の指導事項に基づいて教材を指導することで，児童に，「Ｂ書くこと」の「構成」や「記述」につながる力を育てる指導方法について研究を進める。

福嶋（2010）は，「話す・聞く力」，「読む力」，「書く力」は「論理的思考力」に集約され，国語科は児童に，この論理的な思考の技術を与えることだと主張している。その「論理的思考力」とは，言葉や考えを整理する（関係付ける）ための技術を使いこなす能力であるとし，それは「比べる力」，「たどる力」，「言いかえる力」という３つであると定義している。また，これら３つの関係を整理するのが接続語であるとしている。具体的には，論理的な表現ができるために，接続語を用いたフォーマットである「型」を示して，「比べる」，「たどる」，「言いかえる」表現の指導を行っている。例えば，「…は，…だ。『一方』，…は，…だ。」といったような文づくり等である。

本研究では，福嶋（2010）が述べるような論理的思考力を小学校国語科で児童に身に付けさせるために，教科書教材から文章を構成する文章の構造と機能を児童に捉えさせ，活用させる学習指導過程を設定する。また，教科書教材から文章の構造と機能を捉えさせるためには，教材文の構造や機能を捉える視点が必要であると考える。そこで，本研究では，白石（2009）が提唱している「用語」を共通の読みの視点として児童に与えることと，一文，一語に着目し，教材の分析的な読み取りを行うために，浜上（2009）などが行っている分析批評の考えも参考にする。

（２）文章を構成する構造と機能

効果的な表現法を身に付け，他者に伝わる論理的な文章を書くためには，文章の構成を細かく意識しなければならない。しかし，これまでの書くことの指導では，書く内容の配置を大まかに指導することにとどまっていた。例えば，「はじめ・なか・おわり」の三部構成を基準にしたワークシート等を用いた場合，各部分に書く内容が記された付箋を貼り，文章の配置を考えたり，教科書の文章を真似て書いたりするという活動に終始してしまう。これでは，児童が文章の構成を意識して書くことができていたのかという疑問が残る。

図１　説明的な文章の主な構造

本研究における「文章を構成する」とは，文章を構造と機能の両面から捉え，文章を組み立てることである。構造とは，文章が成り立つ組み合わせ方とする（**図１**）。例えば，段落を作り上げている文，接続語などの並び方などにあたる。機能とは，文や語がもつ働きのこととする。例えば，事実には説得力をもたせる働きがあることや，接続語には段落や文をつなげる働きがあるということである。この文章の構造と機能を理解することで,児童は構成を考えて自分の考えを明確に表現していけると考える。

教科書に掲載されている説明的な文章は,結論を伝えるために具体や問いを提示し，接続語を用いたり，事実と意見を書き分けたりして構成されている。そのため，児童は，論理的に書かれた教科書教材の文章の構造と機能を理解しやすく，自分の考えを表現する際に，理解した文章の構造と機能を効果的に活用して文章を構成することができる。このように，児童が文章の構造と機能といった文章を構成するための知識を学ぶ指導を行うことで，文章の構成について理解でき，児童は自分の考えを論理的に表現しやすくなると考える。

３　説明的な文章を用いた文章の構成に関する学習指導

（１）文章の構造と機能を捉える５つの観点

本研究では，論理的な文章を書くために必要な文章の構造と機能を教科書教材から児童に学ばせ，意見文を書かせる際に理解した文章の構造と機能を活用させる指導を行う。なお，文章の構造については，その時の教材によって違い，様々であることを付言しておく。

文章の構造と機能を捉えるには，児童に捉え方の観点を示す必要があると考える。その観点を，「具体と抽象」，「事実と意見」，「接続語（接続詞・指示語等）」，「問いと答え」，「比喩や相手を意識した表現」の５つとした。これらの観点に着目して，教材を分析的に読み取ることで文章の構造が見え，文章全体の構成や段落，文・語の機能が理解できると考える。そして，捉えた文章の構造と機能を意識して児童が意見文を書くことで，自分の考えを明確にした表現ができるようになる。５つの観点の説明は，以下のとおりである。なお，ここでは，教材文「天気を予想する」（光村図書第５学年）を用いて説明する。

図２　具体と抽象

ア　具体と抽象（図２）

この教材文は筆者の主張，つまり，結論をまとめている抽象部分と説明している具体部分に分けることで，筆者の主張，結論が書かれている部分が分かり，結論が最後にある尾括型の文章であることに気付く。具体と抽象の関係は文章全体だけではなく，段落や文どうしの中でもいえる。

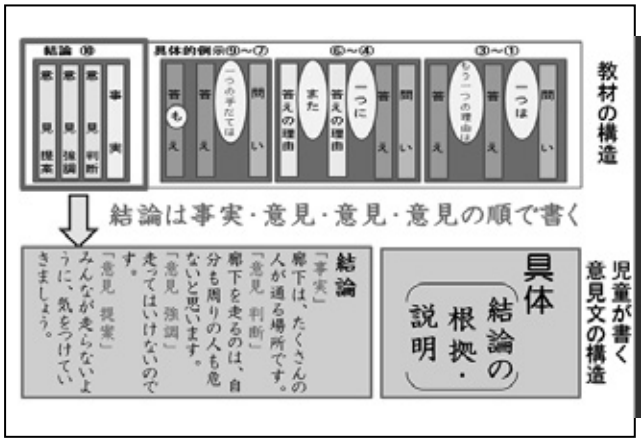


図３　事実と意見

イ　事実と意見（図３）

説明的な文章は，一般的には事実と意見を書き分けて，資料や出来事・実験等の事実を根拠に，意見や結論が書かれている構造が多い。例えば，結論段落を事実の文と意見の文に分けることで結論の構造が分かり，結論は「事実・意見（判断を述べる）・意見（強調する）・意見（提案する）」の順番で書く例を理解する。

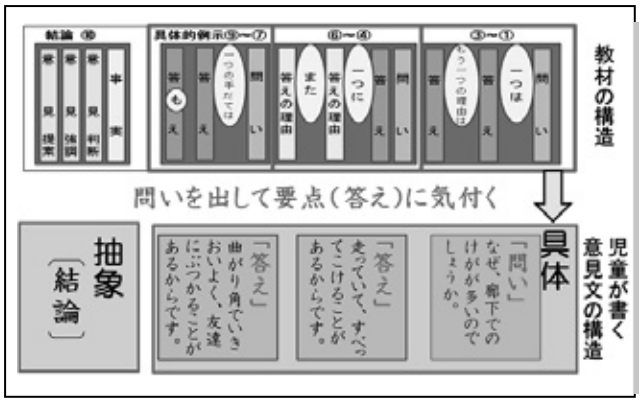


図４　問いと答え

ウ　問いと答え（図４）

問いと答えの文を見つけることにより，具体の部分が問い・答え・答えの繰り返しで書かれている構造ということが分かる。また，問いの答えが文章の要点になるという機能に気付くことで，結論の根拠を示していることが分かる。

エ　接続語（図５）

問いと答えの構造を捉えた後，答えをつないでいるのが接続語であることに気付くことで，接続語には段落や文をつなげる働きがあることが分かる。また，段落や文の対比関係や因果関係などを表す重要な働きをしていることも分かる。

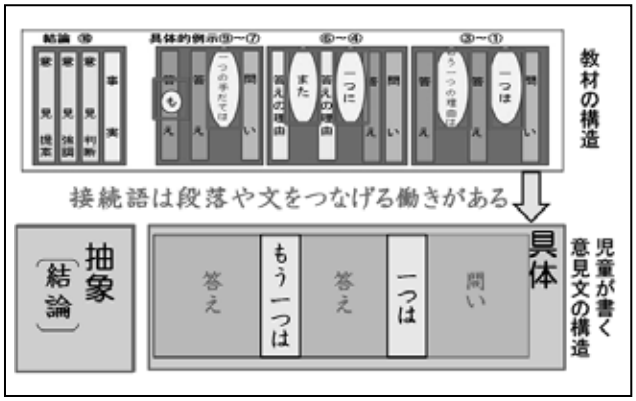


図５　接続語

オ　比喩や相手を意識した表現等（図６）

教材の中で使われている比喩や相手を意識した表現は多く，読み手に分かりやすく，読み手を引きつける文章となる。

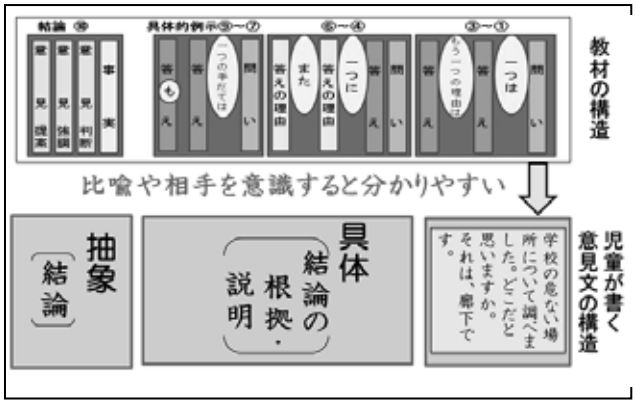


図６　比喩や相手を意識した表現等

以上の文章の構造と機能を捉える５つの観点をそれぞれ理解した上で，児童は意見文を書くことを試みる。児童は具体的に文章の構造と機能を意識して書こうとするので，当然書き方のポイントが明確になる。また，書こうとする文章を自己修正したり，指導者や級友からの助言を聞いたり，級友に指摘したりする観点が明確になり，より文章に深まりができてくる。こうして，文章の構成を理解しながら読むことに基づいて，論理的な文章を書く力が高まると考える。

（２）書く力を育成するための３つの学習指導過程

児童が，説明的な文章から，文章の構造と機能を捉えて意見文を書くまでの学習指導過程を示す（図７）。「気付く・分かる・できる」は，児童が文章の構造と機能に気付いて書く力を身に付けることができるまでの学習の過程である。この学習の過程が成立するように，教材から文章の構造と機能を，「学ばせる・使わせる・広げさせる」指導を通して書くことができるように指導の過程を設定する。

まず，前述した５つの観点が教材のどの部分に表れているのかを見つける〔気付く〕。

次に，表れた５つの観点から文章の構造と機能に気付くことで，教材がどのような構造と機能で構成されていたのかを学ぶことにより，児童が書こうとする意見文に活用できる構造であることを理解する〔分かる〕。

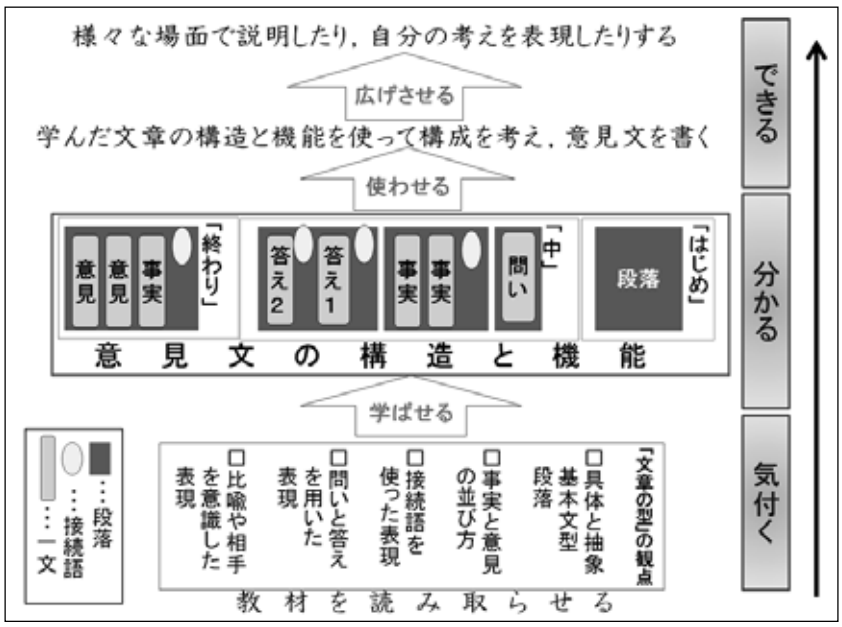


図７　書く力を育成するための学習指導過程

そして，文章の構造と機能を意識して意見文を書き，学んだ文章の構成を活用して，今後の学習場面や生活場面で説明したり，自分の考えを表現したりすることができるようになる〔できる〕。

（３）学びをその場で生かす学習指導過程

教材から学んだ文章の構造と機能を児童に定着させるため，意見文を書かせ，書けたという実感をもたせることが肝要である。そのために，１校時の中で捉えた文章の構造と機能を，その校時の中で活用させ，意見文の一部を書かせる。次時においても，その時間で捉えた文章の構造と機能を，その時間に活用させ，意見文の一部を書かせる。例えば，教材の結論の文章の構造と機能を捉えた時間にその構造と機能を活用して，意見文の結論部分を書く（図８）。このように，どの部分を書いているのかを児童が理解しながら書くことで，相手に伝わりやすい結論の書き方や具体の書き方などが児童に定着すると考える。

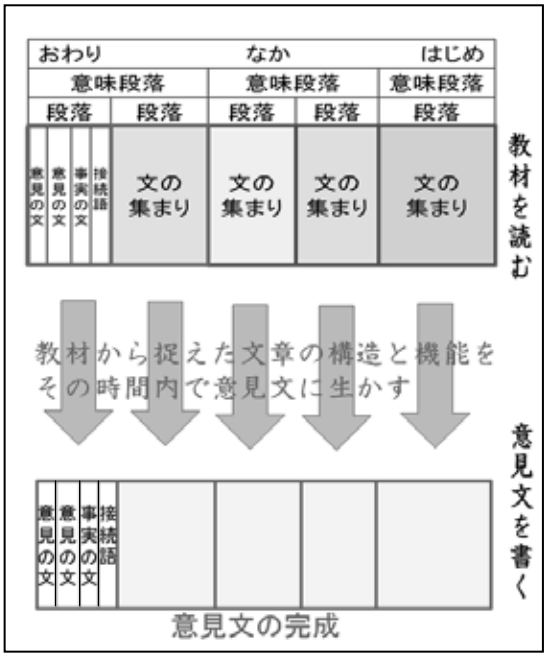


図８　意見文を書くための学習指導過程

４　説明的な文章を学び，意見文を書くことに生かす授業の実際

（１）対象

紀の川市立粉河小学校第５学年 57 名を対象とする。なお，７月に授業を行い，本単元で扱う説明的な文章における「用語」の意味を指導している。

（２）方法

説明的な文章を読み取る時に文章の構造と機能を学び，意見文に生かして書くことができるか否かの分析は，次の４点により行う。

①毎時間の振り返り（「授業を楽しくできた」，「授業が分かった」，自由記述）
②事後アンケート（「読む」に関する項目 10，「書く」に関する項目７，自由記述）
③成果物（ノート・意見文）
④発言・行動観察

①，②は「児童の興味・関心・意欲」について，③，④は「文章の構造と機能の理解・活用」についてである。①は，毎時の授業終了時に「今日の授業は楽しくできた」と「今日の授業は分かった」の２点について，ア「できた（分かった）」，イ「まあまあできた（まあまあ分かった）」，ウ「あまりできなかった（あまり分からなかった）」，エ「全くできなかった（全く分からなかった）」の４件法で児童が自己評価する。②についても同じく４件法で児童が自己評価する。③，④については，各時間で捉える文章の構造と機能を使った表現を児童がしているか否かで評価する。

（３）教材分析

第５学年	単元	「説明のしかたについて考えよう」（全８時間）
	教材名	「天気を予想する」，「グラフや表を引用して書こう」（光村図書）

図９は，「天気を予想する」の文章全体の構造である。この教材は，第 10 段落の結論に説得力をもたせるため，資料を用いて意見の裏付けをしている。また，「問い」と「答え」を用いて内容のまとまりごとに意味段落を構成している。この「答え」となる部分は段落のはじめに「一つは」，「もう一つは」などの接続語を用いて段落どうしにつながりをもたせている。第１，５段落に用いられている２つの資料については，文章によって資料を説明しており，それぞれの文章の構造が，「グラフや表を引用して書こう」の例文（以下，例文）と同じである。

次に，結論の文章の構造について述べる。この教材の結論段落は，「事実・意見・意見・意見」の順番で並んでいる。この順番に関して例文でも「事実・意見・意見」となっている。

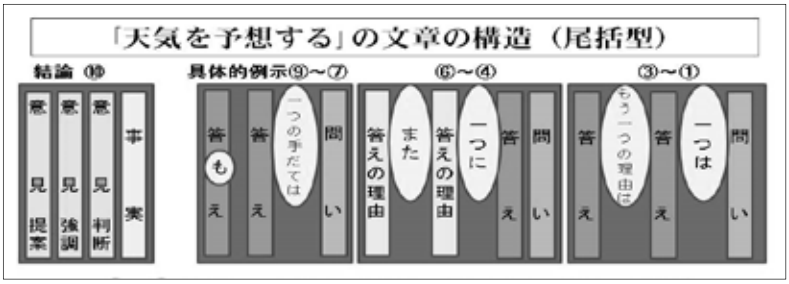


図９　「天気を予想する」の児童に捉えさせる文章の構造

本単元では，①「具体と抽象」から結論と基本文型，②「問い」と「答え」の構造と機能，③それぞれの段落をつなぐ「接続語」の機能，④「事実と意見」を組み合わせて書かれた資料を引用した文章の構造と機能，⑤同様に「事実と意見」を組み合わせて書かれた結論段落の文章の構造と機能の５点を児童に捉えさせる。

（４）授業の概要

図７に基づき，「天気を予想する」を読む活動で，上記５点の文章の構造と機能を児童に捉えさせ，「グラフや表を引用して書こう」でもそれを確認させた。そして，「子どもの体力」を表した資料について，教材から捉えた文章の構造と機能を使って，児童が意見文を書く活動を設定した（**表１**）。なお，授業は第１時から第６時までを筆者が行い，第７時以降は担任が行った。

表１　「説明のしかたについて考えよう」学習指導過程

時	教材名 天	教材名 グ	教材名 体	主な読む学習活動	捉える教材の内容 / 捉える文章の構造と機能	主な書く活動
1		◎		例文の基本文型を捉える。	結論(要旨)・結論の根拠 双括型(結論が「はじめ」と「おわり」にある。)	
2			◎	子どもの体力を示すグラフを読み取る。		グラフを見て分かることを書きだす。
3	◎	○		基本文型と結論の構造を読み取る。	「天気を…」の結論 尾括型(結論が「おわり」にある。) 結論の文章の構造(事実・意見・意見・意見)	
4	◎	○	○	結論に書かれている意見の種類を捉える。	筆者の考え 文末表現で表す意見の種類(判断，強調・断定，提案)	「子どもの体力」についての自分の考え(結論)を書く。
5	◎			問いと答えを見つける。 接続語の働きを考える。	各段落の要点 問いを表す表現・「問い・答え・答え」の繰り返し・答えを示す接続語(「一つは」「もう一つは」等)	「問い・答え・答え」と接続語を使った文章を書く。
6	◎	○	○	資料の引用の仕方を捉える。	資料から分かること・結論の根拠 資料を引用した文章の構造(事実・事実・事実・意見)	「子どもの体力」についての結論の具体的な根拠を書く。
7				意見文を清書し，推敲する。		第４時と第６時で書いた文章をつなげ，基本文型を考えた意見文を書く。
8				相互評価する。		他者への意見を書く。

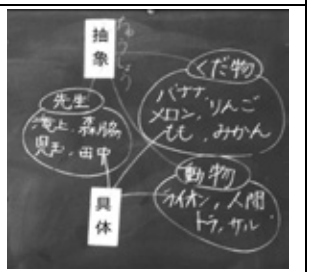
表１中の「教材名」については，「天」は「天気を予想する」を，「グ」は「グラフや表を引用して書こう」を，「体」は，引用する資料として使用した「子どもの体力」についての資料をそれぞれ表しており，◎印は主教材として，○は関連する教材として当該時間で扱ったことを示している。

（５）文章の構造と機能を捉え，活用する授業

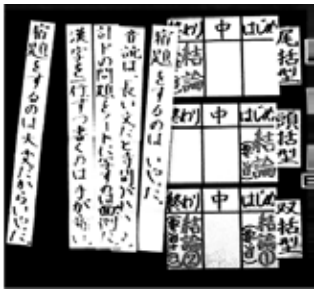
【第１時】文章を読み取るための観点「具体と抽象」

研究のねらい：「具体と抽象」の関係を捉え，例文の「基本文型」を理解させる。

１　「具体と抽象」の指導。
　【発問】板書（りんご，バナナ，みかん）
　　「まとめて，何ですか。」
　【発問】板書（動物）「例えば何がありますか。」
　【発問】板書（教師の名字）「つまり，何ですか。」
２　「基本文型」の指導
　【発問】「一番言いたいこの文章は，どこに貼りますか。」
　【発問】「最初に結論がある文章を何型の文章と言いますか。」
　　Ｃ．尾括型。（以下略。）



３　例文を範読し，結論部分を基に，双括型であることを捉える。
【発問】「この文章の結論は何段落にありましたか。」
【発問】「この文章は何型の文章ですか。」
４　「なか」には，資料（グラフ）が用いられていることに気付く。
５　資料には説得力をもたせる働きがあることに気付く。
【発問】「筆者がグラフを用いた理由は何ですか。」



【第３時】文章を読み取るための観点「事実と意見」

研究のねらい：「天気を予想する」の結論段落を事実と意見に区別させる。
事実と意見の文章の並び方を理解させる。

１　「事実と意見」を区別する指導。
【発問】「先生は女です。事実ですか。意見ですか。」
【発問】（児童の鉛筆を持ち）「これは先生の鉛筆です。事実ですか。意見ですか。」
【発問】「事実とは何ですか。」
【発問】「意見とは何ですか。」
２　「天気を予想する」を音読し，10 段落が結論，尾括型の文章であることを捉える。
３　結論段落を「事実」と「意見」に分ける。
【発問】「10 段落を事実と意見に分けなさい。」
児童は，２文目の「便利になっています。」が事実と意見で大きく分かれた。
Ｃ．便利になっているのは事実だから。
Ｃ．ほんまに便利になってるから。
Ｃ．「います。」って言い切っているから。
Ｃ．筆者の意見で別の人からみれば不便になっているかもしれないし，普通やと思う人もいるから。
Ｃ．他の人が必ずそう思っていない。
Ｃ．事実がまざっているのでどっちともいえない。
など，２つの意見に分かれて話し合い，事実のまざった意見でまとまった。
４　「グラフや表を引用して書こう」の例文の結論も事実と意見の並び方が同じであることを確認する。
５　結論段落は，「事実・意見・意見・意見」の構造であることを捉える。

【第４時】文章を読み取るための観点「事実と意見」

研究のねらい：文末表現によって意見の捉え方に違いがあることに気付かせる。
事実と意見を書き分け，結論部分を書かせる。

１　結論に書かれている意見の文を「判断」「強調・断定」「提案」に分ける。
【発問】「３つの意見を判断，強調・断定，提案に分けましょう。」
児童は，文末表現から，筆者の思いを考え判断していた。
Ｃ．「なのです。」は，決めつけている。
Ｃ．「便利になっている。」は，筆者が決めたこと。
Ｃ．「大切にしたいものです。」は，自分の思いを相手にもしてもらうように伝えている。等
２　「グラフや表を引用して書こう」の例文の結論の意見の種類を確認する。
事実の後は、事実に対する「判断」だと気付く。
３　第２時で読み取った「子どもの体力」についてのグラフを見て考えた自分の意見を，事実・意見・意見・意見の構造で意見の種類を考えて書く。

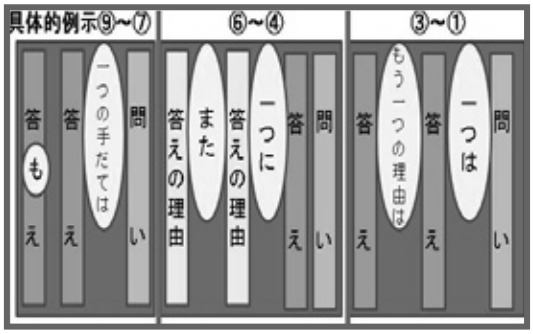
学んだ構造と機能を意見文に生かす

【第５時】文章を読み取るための観点「問いと答え」「接続語」

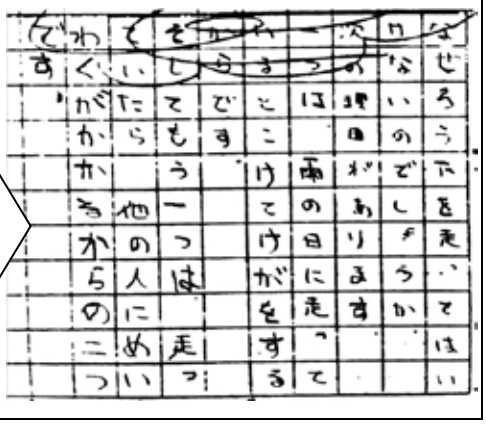
研究のねらい：「問い」と「答え」の構造と機能を捉えさせる。

1　「問い」の段落を見つけ，「問い」の文に傍線を引く。
2　「か」には問いかけを表す機能があることに気付く。
　【発問】「問いを表す一語は何ですか。」
3　「問い」の答えを見つけ，「問い・答え・答え」の文章の構造になっていることを捉える。
4　「接続語」の働きを考える。
　【発問】「答えが二つあることは，どこを読んで分かりましたか。」
　　内容を読んで答えを見つけた児童と，接続語を見て見つけた児童に分かれた。
　【質問】「これまで接続語の働きを分かって使っていましたか。」
　　Ｃ．「あまり考えずに使っていた。」
　　Ｃ．「何となく書いていた。」等
5　「問い」と「答え」を使った文章を書く。

「天気を予想する」の具体段落の構造



学んだ構造と機能を意見文に生かす



【第６時】文章を読み取るための観点「事実と意見」

研究のねらい：資料の引用の仕方を捉えさせる。

1　グラフについて書いている文章を見つけ，資料を引用する際の文章の構造と機能を捉える。
　①グラフの説明（事実）
　②グラフを見て分かること（事実）
2　「グラフや表を引用して書こう」の例文についても，文章の構造と機能が同じであることを確認する。
3　学んだ文章の構造と機能を意識し，「子どもの体力」グラフを文章に表す。

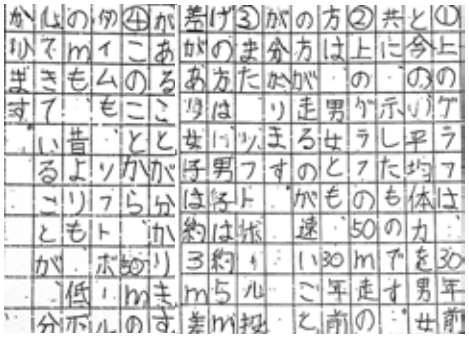
―①グラフの説明
―②グラフから分かること（事実）

年	的中率（パーセント）
1971-1975	79.0
1976-1980	79.0
1981-1985	82.0
1986-1990	82.2
1991-1995	83.4
1996-2000	83.6
2001-2005	86.4

（気象庁資料を表現）

新聞やテレビなどで知らせる天気予報は，以前に比べ，ずいぶんと的中するようになりました。①上の表は，翌日に雨がふるかどうかについて，気象庁が行った予報の的中率を，五年ごとの平均で示したものです。②これを見ると，一九七〇年代にはへ十パーセントに満たなかった的中率がだんだん高くなり，二〇〇〇年を過ぎると八十六パーセント以上になったのが分かります。

学んだ構造と機能を意見文に生かす



【第７時】（学級担任による指導）

意見文を仕上げるため，文章全体のつながりを考え，接続語を用いて第４時で書いた結論と第６時で書いた具体をつなげさせた。それに，書き出しの文章を付け，意見文を推敲・清書させた（図 10）。

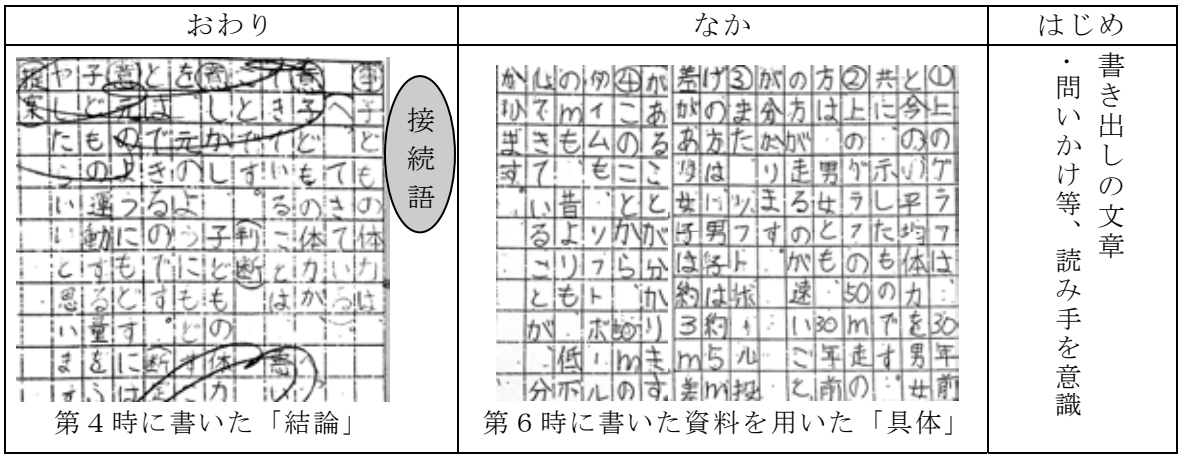


図10　各時間で書いた文章をつなげた意見文

（６）授業についての評価の結果

各時間の振り返り（**表２**）から，ア，イの「楽しくできた」,「分かった」と肯定的に自己評価した人数が高い割合で推移している。本研究における５つの観点に沿った授業展開は，児童にとって初めてのものであったが，表の推移から，文章の構造と機能を学び，意見文に生かす授業については，児童に受け入れられるものであると推測できる。

全時間の振り返りの自由記述を見てみると，文章の内容についての意見より文章の構造と機能についての意見が多く見られ，児童が学習した文章の構造と機能について振り返りをしていることが分かる。しかし，「事実と意見」について指導した第３時，第４時の振り返りの自由記述において，「難しかった。」という意見が多かった。これらのことから，児童は「事実や意見」と「『意見』に種類の違いがあること」は理解できたが，実際に判断することは難しいと感じていることが推測できる。

事後アンケート(**表３**)においては,質問１から４のような説明的な文章の構成や内容の理解については，８割以上の児童がア，イの肯定的な回答をした。また，質問 11 から 16 の意見文を書くという自己評価も同じく８割以上が肯定的に回答している。質問８，10，17 のような様々な場面で説明したり，自分の考えを表現したりする活動へつながる質問においても，合わせて８割以上が肯定的に回答している。自由記述においても，「意見文の書き方が分かった。」や「他の説明文

表２　各時間の振り返り（第１時から第６時）

「楽しくできた」※該当数（全体に占める割合：%）

	第1時	第2時	第3時	第4時	第5時	第6時
ア	42(74)	49(89)	50(89)	52(93)	51(91)	52(95)
イ	13(23)	5(9)	6(11)	4(7)	5(9)	3(5)
ウ	2(3)	1(2)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)
エ	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)
計	57	55	56	56	56	55

「分かった」　※該当数（全体に占める割合：%）

	第1時	第2時	第3時	第4時	第5時	第6時
ア	41(72)	45(82)	40(71)	44(79)	46(82)	44(80)
イ	14(25)	7(13)	16(29)	12(21)	9(16)	11(20)
ウ	2(3)	3(5)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)
エ	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	1(2)	0(0)
計	57	55	56	56	56	55

※８時間のうち第１時から第６時について評価

表３　事後アンケート

事後アンケート項目	該当数(全体57人中における割合:%)			
	ア	イ	ウ	エ
1. 説明文がどんな構成で書かれているのかが分かった。	29(51)	24(42)	3(5)	1(2)
2. 各段落の内容が分かった。	31(54)	22(39)	2(6)	1(2)
3. 説得力をもたせるための文章の書き方が分かった。	34(60)	16(28)	5(9)	1(2)
4. 文章を読んで筆者の思いや考えが分かった。	27(47)	21(37)	7(12)	2(4)
5. 文章を読んで、筆者の意見の部分と事実の部分を分けることができた。	35(61)	13(23)	7(12)	2(4)
6. 筆者や友達のものの見方や考え方を、自分の考えと比べて読むことができた。	18(32)	26(46)	11(19)	4(7)
7. 文章を読んで、内容と似ていること(知っていること)を考えながら読むことができた。	13(23)	33(58)	8(14)	3(5)
8. 今回の学習で、もっと調べてみたくなったり、やってみたくなったりしたことがある。	26(46)	18(32)	10(18)	2(4)
9. 目的に合わせて、資料から必要な情報を取り出すことができた。	31(54)	24(42)	4(7)	1(2)
10. 他の説明文からも、結論や具体例を見つけることができそうだ。	21(37)	26(46)	8(14)	2(4)
11. 段落ごとの内容を考えて書くことができた。	30(53)	22(39)	3(5)	2(4)
12. 説得力のある文章を書くことができた。	31(54)	20(35)	3(5)	3(5)
13. 伝わりやすい文章にしようと考えて書くことができた。	39(67)	12(21)	3(5)	3(5)
14. 文章の中で資料から分かったことを書いて説明することができた。	27(47)	20(35)	5(9)	3(5)
15. 文章の中で、自分の思いや考えを書くことができた。	39(67)	12(21)	5(9)	2(4)
16. 文章の中で、意見の文と事実の文を分けて書くことができた。	26(46)	23(40)	6(11)	2(4)
17. 他の文章も同じように書くことができる。	19(33)	27(47)	7(12)	4(7)

を書きたい。」，「他の文章から結論や事実と意見を見つけたい。」等，「書くこと」や「文章の構成」について興味・関心が高まったことがうかがえる回答が９割を超えた。これらから，児童が「理解できた」，「書くことができた」といった自己効力感をもち，文章の構成を意識して活用しようとする意欲がみられる。

第７時で児童が書いた意見文は，57 名中 55 名が基本文型，接続語，結論と資料を引用した文章の構造と機能を活用して書けていた。問いと答えの構造についても，26 名が活用していた。これらから，児童は必要に応じて意見文に教材の文章の構造と機能を活用できたと推測する。

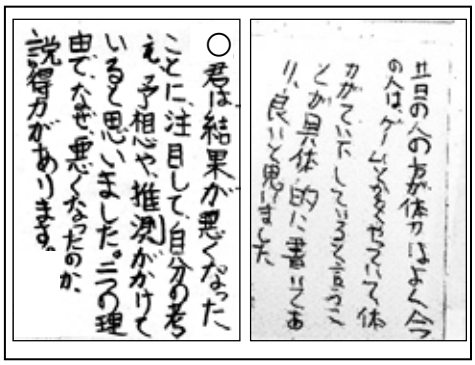


図11　児童の相互評価カード

児童の相互評価カードには，５つの観点に着目した意見が多かった。これらから，児童は５つの観点に着目して，書いたり読んだりしているといえる（図 11）。

５　成果と課題

今回の授業において，文章の構造と機能を理解させることで，児童は教材の内容を理解しただけでなく，相手に伝えるための分かりやすい文章の書き方があることや，効果的な接続語の使い方があることを理解した。また，捉えた文章の構造と機能を活用し，実際に意見文を書いたことで，児童は他の文章を書くときや討論等にも学んだことが生かせることに気付き，進んで活用しようとする意欲がみられた。

しかし，第１，２，５時の「分かった」という自己評価において，否定的な評定をした児童がいたことや，事後アンケートにおいても「分かる」，「できる」という実感を得られなかった児童のいたことが課題である。このような児童に「分かる」，「できる」という実感をもたせるためには，文章の構成を理解する意図を説明したり，活用する場を設定したりするなど，一人一人に応じた支援を考えていかなければならない。

本研究における５つの観点を用いて教材を分析的に読む指導を効果的に行い，児童が構成を意識して論理的に考えを書く力をつけるためには，学んだ文章の構造や機能を活用する経験を重ねていくといった低学年からの系統立てた指導が必要であると感じた。説明的な文章は各学年に３教材は設定されてあり，第１学年から文章の構造と機能を捉え，自分の文章に活用することが可能であると考える。この系統的な学びを生かすことで，児童は論理的な文章を書けるようになり，ひいては，多様な場で活用することができるようになることを期待したい。

＜引用文献＞
※１　言語力育成協力者会議第８回配布資料(2007)
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/036/shiryo/07081717.htm
＜参考文献＞
・青木幹勇（1986）『第三の書く』国土社
・桂 聖（2011）『国語授業のユニバーサルデザイン―全員が楽しく「わかる・できる」国語授業づくり』東洋館出版社
・樺島忠夫（2010）『文章構成法』講談社現代新書
・佐藤明宏（2012）『国語科教材研究の全てー教材研究・指導案・授業実践ー』明昌堂
・白石範孝（2009）『東京・吉祥寺発　読みの力を育てる用語―読解力を支える用語の習得・活用―』東洋館出版社
・白石範孝(2013)『国語授業を変える「用語」』文溪堂
・田近洵一・井上尚美編（2009）『国語教育指導用語辞典』教育出版
・西林克彦（1997）『「わかる」のしくみ―「わかったつもり」からの脱却―』新曜社
・日本言語技術教育学会（2009）『「この言語技術」で思考力・表現力が高まる』明治図書
・浜上薫（2009）『「読解表現力」は「分析批評」の授業で鍛える』明治図書
・福嶋隆史（2010）『国語が子どもをダメにする』中公新書ラクレ
・福嶋隆史（2011）『スペシャリスト直伝！国語科授業成功の極意』明治図書
・文部科学省(2008)『小学校学習指導要領解説　国語編』